

叢談

カードの世紀

第203回

再考、エドワード・ベラミーの 現代的な読み方

『顧みれば』を顧みる

櫻井 澄夫

形状も素材も使い方も
変化し続けてきたカード

アメリカ人のエドワード・ベラミーが、1888年に著した『Looking Backward 2000-1887』（日本語への翻訳版には、『顧みれば』『理想郷物語』『百年後の新社会』など数種の書名がある）は、現在世界中で発行されている「クレジットカード（Credit Card）」というものの、機能上と名称上の「初見」、あるいは書籍における「発明」と一般には目されている。

爾来、ほぼ130年間、クレジットカード、ペイメントカードやそれに類する機能を持ったデバイス（≠道具）や金融システムやサービスは、一見たいした形態上の変化はなさそうに見えても、紙のカードからさまざまな合成樹脂、金属板、それらの組み合わせ、そしていわゆる電子決済と呼ばれるものが出現し、また生体認証というような

ものの発達も促され、とどまる
ところはない。

クレジットカード、ペイメントカードのサイズについても、初期のころはさまざまなものがあつたが、いわゆるデファクトスタンダードが生まれ、さらにISOによる国際的な標準化が行われて現在に至っている。それについては各時期のカードのサイズを計測、比較して本稿で前に述べた（第57回（2009年6月号）の「クレジットカードサイズ」考）。

紙のカードに記入、記載された氏名などの内容、つまり消費者個人のデータは、当初は売上処理のため手書きで転写されていたが、紙から金属、プラスチックへとカードの素材が進歩するに従い、券面に印字、あるいはエンボスされて売上伝票にカーボン紙などを使用して転写、複写されるようになった。その後、磁気ストライプやICカードに記録された情報を端末で読

み取るようになった。カード自体の偽造や処理上の間違いを避けるための技術も発達し、さまざまな方法が試行錯誤を繰り返した後に実装されてきた。

私がこの業界に入ったのは1970年だったが、そのころ、日本のカード加盟店でのカード利用時に、店ではインプリンターの使用は必須ではなく、店員はペンで、カード券面の会員番号や氏名を売上伝票に書き写していた。さすがに大きな百貨店などではそのようなことはなかったが、当然ながら誤写が発生した。カード会社の社員が、新規加盟店でテストのために自分の個人カードを使用したら、その後、その店はカード利用があるたびに、いつもその社員の氏名と会員番号で売上げを上げてくるといふ挿話があつたのを思い出す。

カードの発明者としての
ベラミーの位置付け

さて、冒頭にクレジットカード

の最初の「発明」という言葉を使用したのが、カードをベラミーが自ら発行したわけではない、その業務に直接、間接に携わったものでもない。ベラミーの小説は、100年後の世界を夢想した、あるいは理想社会を構想した小説の中で、現金が完全に廃止された庶民の生活の中にクレジットカードという名称の支払、決済手段を想像したものだ。クレジットカードは国家が管理し、生産、流通、労働の対価としての賃金の支払、海外旅行時の支払までも含むユーケースが想定されていた。つまり、100年後の貨幣制度の在り方を展望し、クレジットカードという架空の決済システムを小説に登場させるユニークなものだった。

それゆえ、言い方として適当であるかは意見があるが、ベラミーが現在のクレジットカードの生みの親と言えなくもない

（その後、この種のカード類が、他のさまざまな名称によっても発行され、それらの多くが淘汰されていった、私のこの連載でもたびたび触れてきたので参照されたい）。

カビール・セガールが、『貨幣の新世界史——ハンムラビ法典からビットコインまで』（早川書房、16年）の中で「クレジットカードは現実の生活がフィクションを模倣することによって誕生したケース」と述べたのは至言であり、ベラミーの著作の現在に至る影響の大きさを如実に表していると言えるだろう。

その後、100年余りの間で、欧米先進国においてさえ、ベラミーが構想した決済システムは理想形としては簡単には完成しなかったかもしれないが、改めてベラミーのアイデアを読み直してみると、現在世界で行っている決済システムは130年後になって、ようやくベラ

ミーの考えた「理想形」に近くなってきたとも言えるのではないか。あるいはベラミーが考えた過程や目標から大きくは逸脱せずに、その路線をまがきながらも着実に歩んでいるのではないのか、との思いに至るのだ。

しかしながら、世界の専門家たちが注目しているにもかかわらず、この書はわが国においては、ほとんど顧みられない。特にペイメントカード専門家の皆さんからは注目されていない。

キャッシュレスの
ご本家はベラミー

ここ에선えつながら、これまで本誌に載せた拙論などをお読みいただくと、本誌の読者の皆さんの多くも、おそらく、19世紀の末にベラミーが構想した社会は、最近のわが国などでの「はやり言葉」で言えばまさに「キャッシュレス」社会であつたことに、いまさらながら気づ

かされるのではないかと思う。

現在、わが国の政府が力を入れていような政策は、もしベラミーが生きていたら、「私の考えを今ごろになって追隨している」と見られてもおかしくないほど、両者は発想的には類似している。日本は、ベラミーが著書の中で構想した社会主義的な諸制度を完全には採用していないことや、電子決済などの技術的な進歩を別にすれば、100年以上の時間の隔たりを超えて、両者の考えに非常に親和性を感じるのは私だけではなからう。

全体主義と親和性の高い キャッシュレス化

セガールの言葉通りに、現在がベラミーを「模倣」していることに多くの皆さんは同意するだろう。そこで私が気になるのは、社会主義、全体主義と完全なキャッシュレス社会との親和性だ。

いわゆる国民全体を対象としたデジタル化や、国策としての個人情報管理の徹底化は、全体主義と最も近い関係にある。情報管理は全体主義国家にとっての目標に合致するがゆえに、容易に国家目標となり、デジタル化やキャッシュレス化が強力に推進されているという事実だ。

デジタル後進国は「追いつくために」、そこから生じる危険性を意識せずに、そうした政策を技術の「進歩」「発達」という面からのみ捉えることの「非」を学習せぬまま動き出し

てしまふ。
ところが、昨今の国家間の争いを契機にして、国際社会はようやく裏に隠れた問題を意識し始めていると言えるのではないか。裏に隠れていた問題は、フアーウェイの問題、中国とカナダやアメリカとの衝突、ウイグル族自治区の問題などによって顕在化し、その点ではこれまで

かなり緊張感が希薄だった日本人も、最近ようやく差し迫った問題として意識し始めた。

ベラミーに対する評価は ここ10年で変化

連載の100回目で述べた「マイナンバー」とペイメントカード——「共通番号制度」の民間活用（道13年5月号）時点では、国境を越えた情報の漏えいはあまり論議されてはいなかったと記憶している。

後述するように本誌に私がベラミーについて書き始めて16年目になるが、その当時と現在のベラミーの指摘した環境は、明確に異なっている。16年前に書こうとしたことと、ベラミーや最近この連載で書いているオーウェルの現代的な位置と評価は、この10年で、明らかに変わってきている。

ベラミーが考えた紀元2000年の社会に、もはや現金の流通はなかった。現金は消え去っ

ていた。したがって、ベラミーが考えた社会とは、意味・定義があいまいな「キャッシュレス社会」、あるいは国によって不正確な「キャッシュレス比率」が論じられるような社会ではなく、正確な日本語なら「非現金使用社会」ということになるのであろう。つまり、真にキャッシュレス社会を志向していくのであれば、ベラミーの書はその原点であり、一種のお手本であった。それゆえに欧米先進国の専門家たちの間で、近年、ベラミーの100年以上前の発想が注目され、見直され再評価されているのであろう。

すでに指摘したように、その割には、わが国の消費者信用、消費者金融、決済システムなどの分野で、ベラミーの名が登場することは極めてまれだった。等閑視されてきた。今回は、そのことについて、最近入手した文献の紹介を交えて、明治期以来のベラミーの思想の日本にお

ける受容について、若干の新資料を基に、今少し持論を展開してみたい。

ベラミーに焦点を当ててきた 「カードの世紀」

さて、私はこの連載で、第23回（06年5月号）に初めてエドワード・ベラミーの『顧みれば』について書き、第24回、第25回（06年6、7月号）と続けて「さあ2000年を過ぎたよ、ベラミーさん——『CREDIT CARD』とどう概念の登場』上、中、下）、その後、第26回（06年8月号）で「ベラミーの思想とその背景——『顧みる』この意味を読み解く」、第90回（12年6月号）に「100年後のクレジットカード——未来の支払手段を構想する力」を書き、その後も何度か取り上げてきた。

ベラミーの著書の 日本における翻訳本

わが国において、ベラミーの名が出るのは、明治期から昭和期の初めに出た、抄訳を含めたいくつかの原文の英語から日本語への翻訳が中心で、それ以外では戦後の英米文学やユートピア論の中に限られていた。戦後、2回翻訳が出版されているが（1953年の岩波文庫（絶版）と75年の研究社版、アメリカ古典文庫7）、これだけカードが普及しても、管見ではクレジットカード関係の書籍でエドワード・ベラミーの名が出ることは、まずなかった。アメリカでは現在まで数十種の版が出版されていて、安価で入手できる。

最近、平井廣五郎による日本語訳の『百年後の社会』が6分冊で復刊された（国会図書館蔵書。16年）。原本の複製なので少し読みにくいかもしれないが、久しぶりの新刊である。

なお、『顧みれば』は、中国でも中国語版の『回顧——公元

2000—1887』（商務印書館、84年。63年に未確認だが初版が印刷されているようだ）が出版されていて、中国の古書店から入手することができた。この中訳本の序文には、「この本には資本主義的な社会制度の矛盾の暴露や空想改良的な政治主張が書かれている」と解説しているが、これには、毛沢東が貨幣のない社会を目指すと言ったことと矛盾がない。ベラミーは当時の中国の政策に合致していると思なされていたので出版できたのだらう。

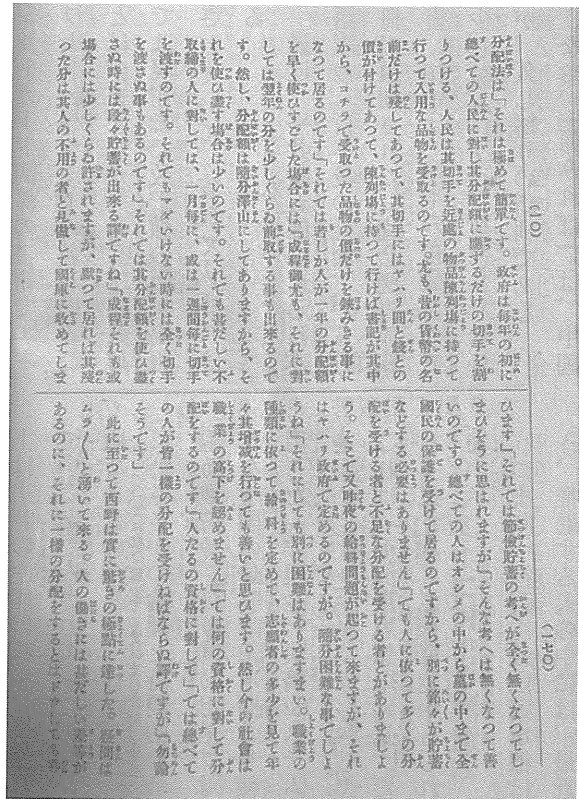
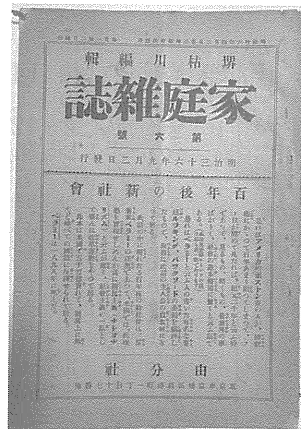
いささかの論理と時間的な飛躍があるが、毛沢東が現在のような中国のQRコードなどを用いた「非現金」決済システムを見たら、どう思うだろうか。これは「毛沢東思想の延長」だと主張することも可能かもしれない。

つまり、社会主義国家を標ぼう、推進する人の中には、最近の決済方式は、自分たちの永年

の主義、主張を実現しているという人もいるのかもしれないが、今の中国人や中国政府がそのような見通しを長く持っていたとは「中国ウォッチャー」の私には思えない。またそういう主張を私は実際に目にしたり聞いたりはしたことはない。これについては、皆さんのご意見を伺いたい。

そこで今回は、ベラミーの事績を改めて紹介したり翻訳するというより、これまでもそうしてきたが、ベラミーの思想の日本での受容について、いささか細かな話になるが、ちょっとしたエピソードを、最近たまたま入手した資料を中心に、私が個人的に気付いたり、関与したりしたことやものを日本的に引用あるいはご紹介していこうと思う。

つまり、欧米など外国の書物には触れられてこなかった日本的な事情について述べ、将来、この方面の調査・研究にあたる



方の利用に供したい。

筆者が入手した 大正、昭和初期の希少本

私は日常的に、国内のみならず、外国からいくつかの分野の書籍や物品を集中的に購入している。暇があると書籍を検索して、何かいい本や資料が売りに出されていないか探している。

先日たまたま「エドワード・ベラミー」関連の印刷物の検索をオークションのサイトで検索していたら、2冊の本が引つかかってきた。両方ともその存在は知っていたし、図書館で見ることができない本でもない。し

かし、本というものは、実物を手にすることができると新たな発見があるものだ。古書は特に図書館の多くでは、データベースはあっても、稀覯本の実物に触れることができなくなってきた。

入手した本の一冊は、明治36(1903)年9月に出版された堺利彦(「堺枯川」は号)編集の家庭雑誌第六号「百年後の新世界」(由分社、抄訳)であ

り(写真1、2)、もう一冊は昭和5年に出版した『理想郷物語』(萬有文庫。文藝社)である(写真3、4、5)。この写真だけでもベラミーの著書の雰囲気は味わっていただけののではなからうか。

前者ではウェスト(West)という主人公の名は、「西野」と日本化されている。クレジットカードは「切手」になっている。

明治の日本の ユートピア論に影響

堺利彦は日露戦争に反対し、

なお、家庭雑誌の創刊号に抄訳の一部が掲載され、第六号には原文の完全翻訳ではない。翻訳した堺利彦は社会主義者として知られ、日本共産党の結成にも参加した。堺には数々の著書があるが、後年出版された『社会主義の世になったら』(文化学会、1920年)もベラミーの著書の翻訳である。有名なウイリアム・モリスの『理想郷』も堺の翻訳だ。こうした書籍の名称から、現金がない社会は、新しく理想的な社会であると見なしていることが知れる。

なお、『Looking Backward』は、1892年に東洋自由党の機関誌「新東洋」が翻訳連載したものが最初だそう(未見)。原著の出版の5年後に日本語版が出たことになる。

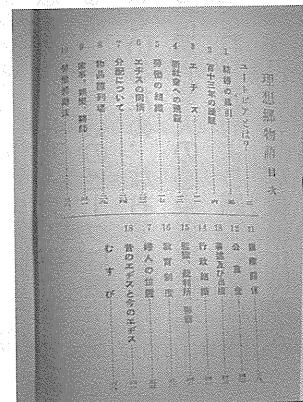
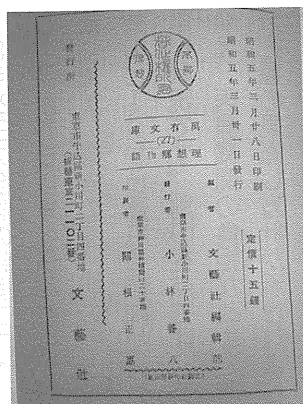
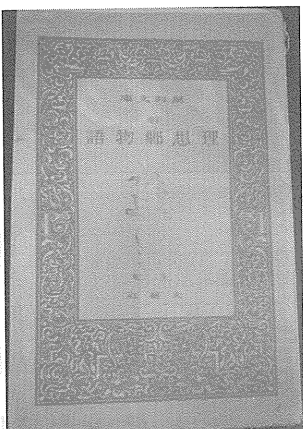
くるだろう。

クレジットカードと田園都市線や田園調布に関係があるという認識は多くの人が持っているが、いのではないかと予想するが、21世紀の私たちの日常生活にも、意外にベラミーは染みついているのだ。

世界の変化の中で、今一度、130年前のベラミーの発想を新たなフィルターを通して、しっかりと把握すると、今まで見えなかったものが見えてくるかもしれない。

こういう新時代であるがゆえ、原点に帰って全体を見直すべきだと思うのだ。1万円札も、「田園都市」と縁がある渋沢栄一さんの肖像が印刷された新札が再来年から発行される。

『Looking Backward』という本、結構おもしろいですよ。古書価がちょっと高くなっているのが、玉にきずですが。



幸徳秋水と平民社を設立したりしているが(黒岩久子『パンとペン——社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』講談社、2010年)、ベラミーについて調べると、幸徳秋水の名がしばしば登場することに気が付く。ベラミーの書が、日本で一時発禁になったりしていることと、大逆事件で死刑になった幸徳秋水との関係が気にかかる。

一方、明治時代から昭和初期にかけてベストセラーにもなった『食道楽』の著書として有名な村井弦斎(1863〜1927)が「20世紀の予言」という当時の新聞記事の真の著者であるとの推測がされているが

『時代の先駆者 よみがえる村井弦斎』平塚市博物館。2000年)、確かにこうした文章の内容は一読するとベラミーの著書と内容が酷似しており、村井がアメリカ留学中などに仕入れた外国の知識をおそらく反映させ書いたものであろう。ベラミーの本は明治の日本人のユートピア論に広く影響を与えたことがうかがわれる。こうした啓蒙思想も欧米から日本に入ってきた時代だった。

なお、日本の住宅開発での「田園都市」構想に大きな影響を与えたといわれるイギリス人のエベネザ・ハワードは、その考えはベラミーからインスピ

レーションを得ているといわれているが、例えば東京近くでは、東急の沿線などに住む人たちの生活にもベラミーの思想が今でも息づいているならば、現在の日本人に広く意識はされていなくても、ベラミーの考えと現代日本人との生活の間にも歴史的には大きなつながりがあることが理解できるだろう。

すると、町名の田園調布や鉄道の田園都市線の名だけでなく、最近話題のデジタル田園都市構想なども、思想的には、明治以来の近代日本のこうした考えを引き継ぐものであろうから、この時期にベラミーを学習する意義は、より明確になって